

赤毛米 特集



北海道米 の原点



科学部と1・2年SSHクラスの生徒で実施

赤毛米とは？

赤毛米は上の写真のように、モミひとつにヒゲが1本ついており小麦のようである。明治時代初期、開拓使が寒冷な北海道は米作りに不適として、屯田兵に対し稲作禁止令を出していましたが、そのような時代に、寒地稲作に挑んだ方が中山久蔵氏です。

赤毛米のはじまりは、1828年大阪府に生まれた中山久蔵氏が1869年に北海道に移り住み、その後現在の島松沢（北海道北広島市）に定住した事からはじまります。中山久蔵氏は、稲作が禁じられていても、それでも自分達の主食は自分達で作りたくて、工夫と苦勞を重ね1873年に寒さに強い「赤毛種」の発芽を成功させました。

また、世界の米づくりの北限として、北海道では赤毛種の子孫である「さらさら397」「ほしのゆめ」「ゆめぴりか」など、寒さに強くおいしいお米がつくられるようになりました。このような「赤毛米」を、科学部と1年8組・2年7組（SSHクラス）の生徒達が田植えから稲刈り、脱穀、精米まで行った活動を集めます。



田植え

平成25年6月7日（金）放課後、赤毛米について事前学習を行い、その翌日に赤毛米の田植えを実施しました。苗は、赤毛種を14年にもわたって唯一栽培する住田さんにかけていただいたもので、大切に育てる思いで始めました。札幌日本大学高等学校近所にある片桐さんの水田の一部をお借りし、北海道米の原点である赤毛種の苗を植えました。

稲刈り

平成25年9月14日（土）生徒達は秋の収穫時期を待って、昨年同様の約二万本の稲刈りを実施しました。

脱穀

平成25年10月中旬～11月21日（木）で脱穀を実施しました。9月に収穫した赤毛米の稲を、お世話になっている地元農家の片桐さんの畑で天日干し乾燥させていました。脱穀には、足踏み方式の回転ドラムにループ状のピンが多数植え込まれた足踏み式脱穀機を使用し、日々少しずつ脱穀を行いました。足踏み式脱穀機は、踏板を踏むと、こぎ胴が自動的に連続回転するように工夫されており、その回転で籾を払い落としました。その後、籾殻や藁屑を風によって選別する農具の唐箕（とうみ）を利用し、約40kgの籾を選別して取り出しました。

精米



平成25年11月26日（火）籾殻をはずし精米しました。精米する前は、46kgありましたが、籾や糠、藁を除くと精米したお米は32kgになりました。

この活動を実施できたのは、苗をわけていただいた住田さん、水田をお貸しいただいた片桐さんをはじめ、関連いただいた皆様のおかげです。ありがとうございました。

